

福生市個別施設計画 公共施設再配置基本方針のイメージ

■再配置基本方針 令和2年度までに策定する福生市個別施設計画に記載する市内公共施設の再配置の検討にあたり基本的な考えを整理したもの

【これまでの市の施設配置の考え方】

- 社会教育基本構想（昭和50年）→現在の社会教育系施設を通学区域毎に配置
- 福生市立地適正化計画（平成30年）→福生駅周辺に拠点集積型施設を誘導

【今後の再配置】

- 福生市公共施設等総合管理計画（平成29年）→人口構造の変化、財政状況から、公共施設機能の総量を抑制、複合化・集約化の推進や長寿命化を図る。
公共施設保有量（総床面積）を20%削減。
- 現在の公共施設は学校区を単位に配置されていることから、身近な小・中学校施設を核として複合化、集約化をしていくことが考えられる。

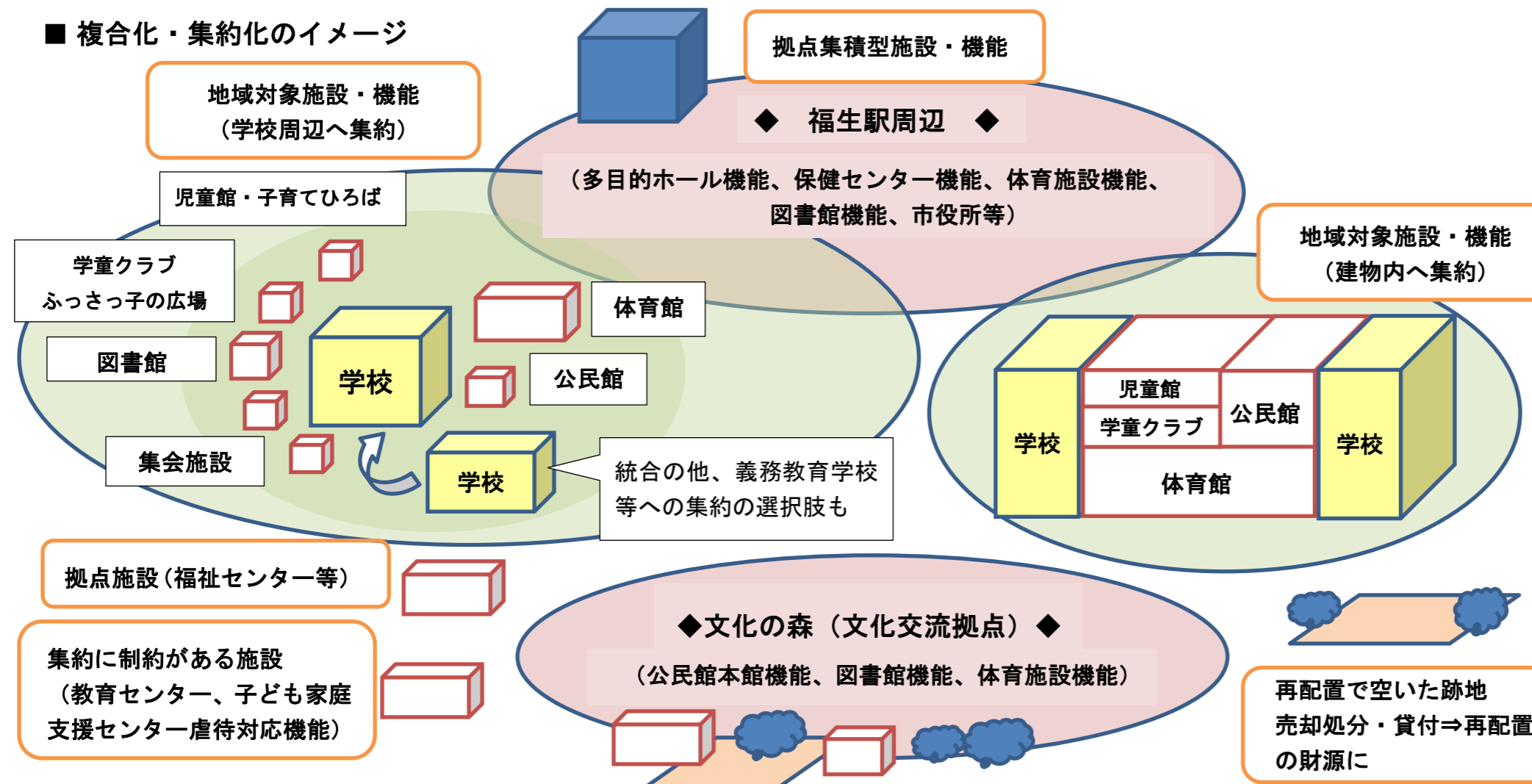
【学校施設を核とした複合化・集約化】

- 学校施設にはコミュニティ・防災の拠点、子どもの居場所等の機能や施設の地域開放が期待されている一方、少子化と空き教室は必ずしも比例する訳ではない。
- 学校と同じ建物に公共機能を併設、学校の周辺や校舎に隣接して、公共施設を建てるパターン

再配置の基本的な考え

- （1）福生駅前と文化の森に拠点集積型施設、中央館機能（市内で1箇所あれば充足する拠点施設）を誘導する。
- （2）地域対象施設・機能（分館等）は学校施設を核に集約を図り、コストの縮減、市民サービスの効率化、児童生徒の学習環境の向上、地域のコミュニティの維持等を図る。
- （3）公共施設総量の4割を占め、総合管理計画の数値目標への影響が大きい学校施設の適正配置の検討を今後も進めていく。

■複合化・集約化のイメージ



◆学校施設を核とした複合化集約化◆

【効果】

- 学校施設の機能を共用・開放することにより地域ニーズに対応（体育館、校庭、プール、図書館・集会施設）
- 学校隣接地や敷地内に集約した施設機能を学校教育にも活用することによる学習環境の向上
- 学童クラブ、ふっさっ子の広場を施設内に整備すれば、新・放課後子ども総合プランに基づく一体型事業が実施できる
- 施設が近接、機能連携することによる利便性、防災力の向上
- 住民、児童生徒のイベント相互参加、交流

【課題】

- 責任分担が明確になる区分（別棟とする等）、防犯、安心安全の工夫
- 間取り、設備を変えられる設計の検討（スケルトン・インフィル方式）

再配置で空いた跡地
売却処分・貸付⇒再配置
の財源に